転生した元勇者の物語

紅柴の月希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生した元勇者の物語

【Ｎコード】
Ｎ０７９３Ｑ

【作者名】
紅柴の月希

【あらすじ】
１７歳の普通の女子高生だった私は行き成り、勇者として召喚された。私に関係ない世界を魔王から救うために、私はすべてを奪われた。そして、無理やり魔王討伐に行かされた。でも、大切な人達ができ、恋をした。そして、魔王を封じることができた。
その後、いろいろあって好きになった人を庇って私は死んだ。叶えられることがない約束と思いとともに…
その数十年後、私はある家族の末っ子として転生。今度こそ、幸

せな人生送りたい！！

手紙

元気にしていますか？
わたしは転生して５年が経つけど風邪も怪我もなく元気に過ごしてます。

今の家族はとても優しいです。かあさま、とうさま、にいさまが５人です。

かあさまととうさまは仲よしで、にいさまたちが云うには『万年新婚夫婦』だそうです。ほんと６人の子供がいるとは思えないほど仲よしで、にいさまたちははやく家をでたいそうです。
かあさまは１９才の長男がいるようには見えない若さで、今でもナンパされたりしてます。（ナンパした人たちはウラでとうさまにシマツされてるそうです）

そうそう、わたしの家は昼はレストランで夜は酒場をしてます。けっこう儲かっているそうです。
にいさまたちは手伝ってるけど、わたしはまだ手伝わせてもらえません…　とうさまとにいさまたちはずっと手伝わなくていいと云ってるけど、はやく手伝いたいとおもいます。

最近はとうさまたちが過保護で困ってます。
近所のおとこの子たちもおどしているそうです。どがすぎたようで、かあさまに叱られていました。ばつとして、１週間デザートとお酒なし＋お店の片づけと周りのそうじをさせられていました。ちょっとかわいそうだったから、最後の日にかあさまといっしょにお

菓子をつくってプレゼントしました。
とってもよろこんでくれて、たくさんキスされました。困ったけど、うれしかったです。

そんなとうさまは、むかしは宮廷魔術師だったそうです。なんで今田舎のレストランをやっているかというと、育休がとれなかったことかあさまとすごす時間が少なかったからだそうです。

にいさまたちは、上から順に、
・１９才　近衛騎士団
・１６才　宮廷魔術師
・１６才　騎士見習い
・１４才　王立魔術師育成学校　３年　首席
・１１才　王立魔術師育成学校　１年　首席

という、エリートまっしぐらです。
学校に通っている下の２人のにいさまたちは休みのたびに帰ってきて遊んでくれます。上の３人のにいさま１ヶ月に１回帰ってくればいいほうで、下のにいさまたちと休みがかぶるとケンカになってます。わたしと遊びたいそうです。むだに力があるせいでなかなか決着がつかなくて、かあさまが止めるまでつづきます。（とうさまだといっしょにケンカするのでいみないです）

かあさまが最強（凶）です。

精霊たちも今でも仲よしです。前みたいに話してくれます。むかしの記憶をおもいだしたとき、とてもよろこんでました。

とうさまたちはわたしがむかしの記憶をおもいだしたことはしらないです。話すことではないとおもうし……、話したあとの反応が

こわくてはなせないです……

あのときの約束おぼえてますか？
忘れてればいいなとおもっています。あの約束はあなたの重荷にしかならない。
だから、もしおぼえていたら忘れてください。わたしは今とてもしあわせです。どうか、あなたもしあわせになってください。

リン・タチバナ（橘　凛）より

かいふうした日のうちにもえてけしてくれるように、精霊にたのみました。やけどしないように気をつけてください。

手紙　（後書き）

主人公の兄の年齢を一部変更しました。

始まり

私はどこにでもいる普通の高校生だった。
普通に学校に行って授業を受けて、放課後は友達と喋ったり、部活がある日は部活に行ったりして、土日は家でごろごろして過ごしたり、ショッピングに行ったり、そんな日がずっと続くものだと思ってた。あの日までは……

私は突然異世界に勇者として召喚された。何か特殊な力があるわけでもなく、頭がいいわけでも運動神経がいいわけでもないのに召喚された。普通に17年生きてきた私は、異世界に来たこと、勇者だということが信じられなかった。

召喚の影響か最初はぼーと辺りを眺めていた私の周りには十数人の人がいて、その人達は私を値踏みするように見いて、何かぼそぼそと話していた。そして、その中で一番豪華な衣装で悪趣味な程宝石をじゃらじゃら着けた人を見下した眼をしている太った不細工な男が、近くにいる根性がひん曲がってそうな顔をした男に部屋全体に響く音量で、私がホントに勇者なのか確認した。そして、そうだと男が肯定するとそいつは私に魔王を倒すように命令してきた。まるで、私が自分の命令を聞くのが当然のように……

怒りが湧いた。勝手に召喚して、謝罪も説明もなしに行き成り命令して、何様だ！ってね。私は考えるより先に思いっ切りそいつら

を罵った。ふざけんなっ！！って、家に元の世界に帰してって……
そしたら脇に控えてたらしい兵士に、腕を捻られて背中と頭を床に抑え付けられた。罵ったそいつらはその国の王と宰相だったみたいで不敬で抑えられた。
で、床に這わされた私をみて馬鹿にするように笑って、魔王を倒したら帰してやると、上から目線で云った。
納得できるはずもなく抵抗すると牢屋に入れられた。私は、泣くこともできなかった。その日から、拷問じみたものが始まった。何日か、もう時間の感覚がなくなるころとうとう私は魔王を倒すこと承諾した。

もう何もかもどうでもよくなっていた。自分が今何を感じているのか、考えているのか、自分のことなのに自分のこととして認めることができなくなっていた。この時、私は一回死んだと思う。

私の世話係の侍女達はそんな私を人形のように、心がない魔王を倒すための道具のように扱った。話しかけてくることもなかったし、どうどうと悪態を吐く者やさぼる者もいた。護衛に付いた兵士達は守るというより、四六時中私が逃げ出さないか、逆らわないかどうかを監視していた。

そんな私のことを城の中で心から気遣ってくれるのは、精霊達だけだった。彼らは何も応えない私に根気よく話し掛けてくれた。この世界の歌を歌ってくれたり、小さな可愛い花や木の実を届けたりしてくれた。

魔王を倒すための武器や旅に必要な物の準備などで半年が経ち、とうとう私は出発した。勇者の私と私の世話係の奴隷の少女一人と、私が途中で逃げないように見張る騎士と兵士が数人だけで、何とも心もとない魔王討伐隊だった。王達は私が失敗してもまた新たな勇

者を呼び出せばいいと考えていたんだと思う。

私達は魔王がいる北の荒野に旅だった。この道中で初めて私は命を奪うことの罪の重さ、命の尊さを知った。今まで生きていた、暖かかったのが急速に冷たくなっていくのは何も感じなくなっていても堪えるもので、精霊達が傍にいてくれなかったら耐えられなったと思う。

そんな道中で私は大切な人と出会った。

彼は隣国の軍事大国の皇太子だった。彼の国は異世界から勇者を召喚するのを反対していたらしく、召喚を阻止できなくてすまない、この世界のことに巻き込んでしまってすまないと、彼と彼の部下達は頭を下げて謝った。

彼らの眼には偽りはなく、心の底から謝っていること悔やんでいることがわかった。

そう、私はわかった…　感じることができた……

最初、私は自分が涙が流れてることに気が付かなくて、彼に抱きしめられて彼の服が濡れていくのを見て自分の眼から涙が流れていることに気が付いた。止めることができなかった。そして、私はこの世界に召喚されてから初めて人に縋りついて抱きしめられて、心を閉じ込めることで今まで封じ込めていた不安や悔しさ、悲しみをすべて吐き出すように泣いた。

彼は私が泣いてる間ずっと抱きしめてくれて頭を撫でてくれて、彼の服を握ったまま泣き疲れて寝てしまった私を無理やり剥がすことはしないで一緒に寝てくれた。次の日の朝の起きた時に彼の顔が近くにあった驚きと、その後の羞恥心は凄かった。

私は感情を取り戻すことができた。
私はやっと精霊達の好意を感じることができて、笑顔で答えることができるようになった。

それからずっと彼らと行動を共にした。移動も休憩も食事も私を召喚した国の人達の方に行かずに。
彼らは自分の国のこと、今までした面白い失敗や体験、恥ずかしい出来事など色々話してくれた。

私はたくさん笑った。この世界で初めて感じた幸せな時間だった。でも、幸せな時間はいとも簡単に壊されることも知っていた……

だけど、彼らと過ごす時間はそのこと忘れてしまう程幸せな時間で、ずっと続いて欲しいと望んでしまうものだった……　忘れてはいけなかったのに、油断してはいけなかったのにっ…

旅立ってから一年が過ぎた頃、私達は魔王を倒すことはできなかったが封じることに成功した。

終わり。　そして、始まり…（前書き）

今回少し長いかもしれないです。

終わり。　そして、始まり…

私は後悔してないよ。だって、私がなくしたものを取り戻してくれた、掛け替えのないものをくれたあなたを守れたんだ。

魔王を封じた後、私は私を召喚したあの国に元の世界に帰してもらうために戻ったが、魔法が使えないように魔法封じの魔法が施された塔に閉じ込められた。

あの王達が、勇者という素晴らしい道具（わたし）をみすみす逃すはずはなかった。私も簡単に元の世界に帰してもらえるとは思っていなっかたし、政の道具にされることも想像していた。でも、でも……諦めることができなっかた。もしかしてと思うと、どうしても……っ。

それに私は誰にも……、精霊の長達にも知られてはいけない秘密を抱えていた……

王達は、私がこの国を大切にしていると、守護すると云ったと偽りの公布をし、すべての国に魔王を封印した私に貢ように要求した。私を神聖化した国や、この国の報復を恐れた力のない小国や逆らうことができない属国等はその要求に従った。

しかし、彼の国や同等かそれ以上の力を持つ国、精霊から私が閉じ込められていること聞いた国は屈することなく王達を非難し、私を開放するように訴えた。特に、彼は私を助け出そうと頑張ってくれた。

私が閉じ込められてから少しった頃、この国の各地で異変が起き

始めた。全く雨が降らなくなり井戸や湖、川、泉が枯れ始めり、逆に洪水が起きて浸水する程雨が降ったりなど今までない異常気象が起こった。

この国から精霊の加護がなくなったからだ。

精霊は私を傷つけた者達を…、この国を許さなかった。

精霊の加護が無くなった土地は悲惨で、この国の歴史上最大の大飢饉が襲った。この年、多くの民が亡くなった。

それなのに王や大半の貴族は、私を開放することなく閉じ込め続け、そして、自分達の贅沢三昧の生活を続けるために民に今まで以上の重税をかけた。

愚かな王達は、私を捕らえている限りまた精霊の加護を取り戻せると考えていた。

そして、こんな機会を彼が見逃すはずがなく、彼の率いる軍が攻め込んで来た。重税に苦しんでいたこの国の民も立ち上がり戦った。

瞬く間に制圧されて、開戦から3日後には王都を除くすべてが制圧された。

でも、私はこの時、彼が助けに来てくれたことを素直に喜べなかった…　薄情な子と云われてもしょうがない。

だって、誰にも知られていない…　知られてはいけない秘密を抱

えていたから……

私は彼の国に保護された。あの国と違って待遇はとてもよかった。

保護されてから、彼は毎日忙しい執務の合間に私に会いに来てくれた。だけど、私は会うことはしなかった。

本当はちゃんと会って助けてくれたことのお礼を云いたかったし、楽しいことくだらないこととか色々話したいことはあったけど、私が隠している秘密は魔力が強い人にほどばれやすい。彼はこの世界の五指に入るほど強い魔力を持っていた。

だから、会えなかった…

彼に会うことはなく、3ヶ月が過ぎた頃、最初の頃は魔王を封印した勇者として丁重に扱ってくれていた侍女達が、彼に会うのを拒み続けていたことが気に入らないのか仕事が雑になっていった。あの国よりははるかにましだけど、挨拶しても返してくれないし何か頼んでも無視されるようになった。

私がどうしようもできないからそのままでいると、彼女達の行動はエスカレートしていった。最終的には、食事だけ用意するだけになった。

全く悲しくなかったわけじゃないけど昔みたいに泣くことはなかった。

それより大変なことが起きたし。

とうとう精霊達と一緒に旅をしたこの国の最年少宮廷魔術師に秘密がばれてしまった。

その頃はもう痛みが物凄くて隠し通すのが難しくなっていたからしょうがなかったかも…　精霊の各種族の長の六人にはよくここま

で隠し通したと思った。

彼らは彼に報告すると云ったけど必死に止めた。誰かがどうにかできるものでもないし、彼がしったら責任を感じるかもしれない。それに、私の望みが叶わなくなるから……

また少し時が流れ、雪が融けその下から新たな芽が出て、眠っていた動物たちが起き、暖かな風が吹く春がやってきた。

冬から体調を崩してから、ベットで生活していた。

私の侍女は新しい人達になった。なんでかというと、私が体調を崩したことで仕事をしていなかったことが彼にばれて全員解雇になったから。

新しい三人の人達は仕事をちゃんとするし、とても親切だった。ベットからでれない私が退屈しないように面白い本を持ってきてくれたり、王都で流行っているおいしいお菓子をくれたり、彼の小さいころのことを話したりしてくれた。

彼女達は彼の小さい時から世話をしていた侍女だった。

助けてもらって結構経つけど彼には一度も会っていないそんなある日、彼から彼の誕生日パーティーの招待状がきた。断ろうと思ったけど、彼女達と精霊達が行けとしつこかったので行くことにした。

それに、もうそろそろ……と感じていたから……

彼女達は彼が私のことを心配しているのを知っていたのと私が元気なときも部屋から出ないこと心配してたからで、精霊達は何も云

ってないのに私の望みを薄々感ずいていたからだと思う。

当日、私は前日に彼から送られてきたドレスとアクセサリーを身に着けた。彼女達はきれいだと云ってくれたが鏡に映った私は微妙だった…

日にあたらなくなった肌は病的に蒼白くて、身体は肉がなく骨と皮だけみたいな私には、パフスリーブで袖がフリルでレースで、地面にするほど長いスカートで胸のところには繊細な刺繍がしてある薄紫のドレスは豚に真珠みたいだった。

馬子にも衣装にもならなかった。

まだ、彼と出会ったころの私だったらもう少しマシだったかも…

エスコートは彼ではなく闇の精霊の長に頼んだ。私の秘密を隠すのと、もしものときに幻術が得意な闇の精霊の長がいてくれると頼もしいから。あと、毒を盛られたときに密かに処理してもらうために。

そして、夕暮れとともに始まった。

流石王族主催だけあって、貴族や各国からたくさんの人達が来ていた。

今日の主役の彼より目立つといけないので私は勇者ということを隠して参加することになった。

精霊達しか知らないが、私はこの前の冬から日が落ちると立っていられないほどの痛みと苦しみが襲ってくる。

王族がこの会場に入場するのは開始から一時間後ぐらいなので完全に夜になっている。

私は勇者だとばれないように顔の上半分を隠す仮面を着けているから、それで苦痛に歪む顔も隠すことができ、壁沿いに並べられている椅子に座っていればなんとか乗り切れると考えていた。

王族も無事に入場し何事もなく順調に進んでいった。

私も気絶するような激しい痛みもこなくて闇の長に多少支えられながらも椅子に座っていることができたし、魔王討伐の旅を共にした人達と喋ることができて久しぶりに楽しい時間を過ごすことができた。

一緒に旅をした彼の幼馴染兼護衛の近衛騎士と喋っていて闇の長が飲み物を取りに行ってくれてたとき、私の周りが急に騒がしくなった。気になって目を向けてみるとそこには彼がいた。私の視線に気づいたのか、彼は歩くスピードをあげて近づいてきた。そして、痛みを忘れて呆然と彼を見ていた私を力強く抱きしめた。

彼は、……やっと会えました…っ、と耳元で呟いた。

私は周りであがる女性達の悲鳴より、彼のその言葉の方が大きく聞こえた。また痛みがぶり返してきたが気にせず、私は彼を抱きしめ返した。

瞳に溜まった涙が零れそうになったけど零さないように耐えた。零したら涙だけじゃなくて隠している秘密までこぼしてしまいそうだったから。

だから、怪しい気配に気づくのが遅れた。

彼の胸から顔を上げたとき、近くに一人の女性が無表情で立っていた。彼女は私と視線が合うと憎悪のこもった眼になって、隠し持っていたナイフを彼に振り下ろそうとした。

その速さは速くて、彼や近衛騎士、会場にいるすべての人達が反応できないものだった。たぶん、魔法で速度を上げてたんだと思う。

私は彼を思いっきり引っ張りその反動で、彼と自分の位置を強引に入れ替えた。

そして……

彼に刺さるはずだったナイフは、私の背中に深々と突き刺さった。

一瞬、時が止まった……

止まった時を動かすためのように、じわじわと傷口から血が流れていった。彼の眼の色とお揃いの薄紫色のドレスが紅く染まっていった。

さっきとは違う悲鳴があがった。

私にナイフを刺した彼女は何か叫んでいたがすぐさま兵士に取り押さえられた。

痛みと物凄い熱さが辛くて私は彼に凭れ掛かった。高いだろう服が血で汚れるのを気にせず彼は叫ぶように私の名前を呼んで強く抱きしめてくれた。

「リンッ、リンッ？！しっかりして下さい！…リン！！」

そんなにでかい声で叫ばなくてもいいってほど必死に私の名前を呼んでくれた。

不謹慎だけど彼が私の名前を呼んでくれるのがとてもうれしかった。

だから、止血のために彼が私のドレスを裂くのを止めれなかった。必死に隠してきた秘密がばれてしまうのに……

予想してた通り彼は私の背中を見て驚いた。彼と旅してたころと違う肌の白さだけじゃなく、私の背中一面…いや、身体全体に赤黒い不気味な模様が描かれていたから。

驚いて固まる彼の顔に手を添えた。それだけでも全神経と体力を使った。

彼はぽつりと、最後は叫んで「なんで……っ、なんで黙ってたんですかっ？！」と涙を浮かべてまるで自分自身を責めるように訊いてきた。

もう喋る気力もなくて私はただ微笑んだ。

きっとそういう苦しそうな顔をするのを知ってたから……　だから、知られたくなかったんだ。

彼は私がこれを、魔王の呪いを受けたことを知ったら自分を責めることがわかっていたから、どうしても云えなかった。

「テメーがそうやって自分を責めるとわかっていたからだろ」

彼の問いに、いつの間にか戻って来ていた闇の長が答えた。

闇の長は私に意味深げな視線を送ってきて、私は彼が何がいいたいのかわかったのでそっと首を振った。

「そうか……」

闇の長はそう呟くと私の頭を優しく撫でて彼の腕の中にいた私をそっと彼から取った。彼は私を取り戻そうと腕を伸ばしたが突然登場した他の精霊の長達に阻まれた。

そして、長達は、

「聞け、人間達よ」

「我等は精霊を統べる者なり」

「私達の姫を帰してもらいますわ」

「貴様らは我らの姫を散々傷つけてきた」

「姫は負わなくていい呪いを」

「傷を負った」

淡々と告げていった。

私が止めることができないのを知っていて……

「姫の望みを教えてやる」

「姫の望みは…」
「「「「「「死ぬことだ（です）（わ）」」」」」」
私はただ聞いていることと彼を見ていることしかできなかった。
「リンは死ぬんですか…？」
彼は何か耐えるように訊いた。
「そうだ」
「俺達は姫の望みを叶える。それが、俺達がこの世界にいる意味だ」
色々反論したかったけど、私はもう意識を保つだけで精いっぱいだった。
「だから、貴様に教えてやろう」
「姫はいずれこの世界に新たな命として生まれます」
「呪いを受けたせいで、もう姫は元の世界に戻ることができないからな」
彼は強い意志の籠った眼で私を見つめて云った。
「俺はどんなことがあろうとリンを愛し続けますし、また生まれてくるならどんなことをしても見つけ出します。だから、
俺と結婚してくださいね」
私は嬉しくて嬉しくて涙が零れた。
それが、私が最後に記憶したことだった。

『精霊に愛されし姫が亡くなりし日から世界は精霊の悲しみに包まれた。
精霊は人々を見捨てはしなかったが、昔のように語らうことをやめた。
精霊は嘆き続ける。姫がこの世界に再び戻って来るまで』

勇者が亡くなり数十年がたったある年、小さな村で一人の女の子が生まれた。

精霊は喜んだ。姫が戻って来たと……

終わり。　そして、始まり…（後書き）

これから徐々に、彼のことや精霊のこと、魔法のことなど補足していきます。

わたしの家族（前書き）

主人公の一人称が私→わたしになって、口調も違います。
今回は短いです。

わたしの家族

はじめましての人ははじめまして。おひさしぶりな人はおひさしぶり。

わたしはリーナシア・ブランシャール、５歳。

前世はこの世界に勇者として召喚された橘（たちばな）凛（りん）、享年１８歳？。自分でいうのもなんだけど、結構ハードな人生だったよ。勝手に召喚されて勇者にさせられるし、魔王に呪われたりしたからね。

でも、死んだことは後悔してないんだよ。そのことはこれからね……

前世の生活より今のわたしは平和にのんびりと暮らしてるかな。

わたしの家は国境付近の田舎の村のレストラン兼酒場を経営してて、とうさまとかあさまの作る料理はとってもおいしくて人気なんだ。旅をしてる人とかまた寄ってくれたりするよ。

とうさまとかあさまは昔はお城で仕事をしてたんだけど、一番上のにいさまが生まれるときに王様が育休くれなかったから二人してやめてこの村に来たんだって。今でもたまに、とうさまとかあさまの昔の同僚の人達が会いにくるんだよ。

わたしの家族を紹介するよ。

とうさまは名前はシルヴァン、６９歳、元宮廷魔術師。なんでやめたのかというと、育休が取れなかったからだって。妻命・娘命で、にいさま達とよくわたしを取り合ってケンカしてる。

かあさまは名前はレティーツィア、６５歳、６人の子供がいるようには見えない美女で、よく給仕中にお客さんにセクハラされてるけど、ボコボコにして慰謝料を取ってる。家族の中で一番最強（凶）で、とうさまには逆らうにいさま達もかあさまに逆らうことはしないんだ。とうさまと違ってわたしも悪いことをすると容赦なく怒るよ。

にいさまは5人いて上から、ダリウス、アンテルム、アンセルム、フローレン、リョドヴィック。

１９歳のダルにいさまは王都で近衛騎士として、１６歳の双子のテルにいさまが宮廷魔術師でセルにいさまが騎士見習いで、レンにいさまとリューにいさまは魔術師を育てる国の学校、王立魔術師育成学校に通ってるんだ。

寮生活なのに下の二人のにいさまは休日によく家に帰ってきて、わたしと遊んでくれる。上の三人のにいさまは仕事が忙しくてあんまり帰ってこない……　でも、帰ってくると疲れてるのに遊んでくれる。

あきないの？と、思うくらい毎回にいさま達は帰ってくるととうさまとケンカする。最後はかあさまが止めに入って皿洗いをさせられてる。

王都で仕事をしてるかあさまのお友達が、ダルにいさまとテルにいさまとセルにいさまはファンクラブがあるほど有名人らしくて告白する人が後を絶たないんだって。王都にいたときは、とうさまもモテていたんだって。でも、かあさまの尻にひかれてるとうさまやシスコンのにいさま達を見たらどう思うんだろう？

かあさまがダルにいさまを生んだのは４６歳で結構若いときなん

だ。
この世界の寿命は魔力の量によって違っていて、魔力が多い人ほど長生きするし、一般の平均年齢も３００歳だから７０過ぎに生む人が多いんだ。とうさまとかあさまは魔力が多いから５００歳ぐらいまでいきるんじゃないかな。

あっ！
みんなが呼んでる。
じゃあ、またね。

わたしと、とうさまと、かあさま　１（前書き）

お気に入り登録が１００件を超えました！＼（＾○＾）／
ありがとうございます。

楽しんで下さると嬉しいです。

わたしと、とうさまと、かあさま　1

わたしは8時ぐらいに起きる。起きると、にいさま達がいない時は一緒に寝てるかあさまはもう起きていて、今日一日の下準備をしている。

まだ体が小さいのと寝るのが好きだから早起きができない。

わたしの家は二階建てで、二階は住居で一階で昼はレストランで夜は酒場をやってるんだ。レストランは結構人気で常連客も多いし、わざわざこんな森の中の田舎の村まで食べに来てくれる人もいる。最近は、村の人以外は予約を取るようになった。

着替えて、顔を洗ってからご飯を食べるために下に降りると、調理場を覗くとかあさまが野菜を切っていた。

「おはようございます、かあさま」

「おはよう、リーナ」

かあさまは庖丁を置いて、エプロンで手を拭きながら寄ってきて、わたしの髪を撫でた。

「ふふ、今日はいつもより寝癖がひどいわね。ちょっと待ってなさい、今蒸しタオル準備してくるわ」

タオルを取りに行くためにかあさまは二階に上がって行ったので、一先ずわたしは調理室から出て鏡がある洗面所に向かった。

洗面台は家族みんな大きいから、一般の家庭より大きく造られて

いる。小さいわたしは洗面台の横に置いてあるわたし専用の台に乗らないと使えない。

洗面台まで持って来て台に乗って、鏡をみる。

うわぁ、ホントにひどいや。爆発してるよ……

かあさまに似たのは嬉しいけど、細いしやわらかいからよく絡まるし、寝癖が毎日できちゃうんだよね。

鏡を見て爆発してるところを何とかしようと手で梳いてみようとするけど、引っ掛かって痛いだけだった。

悔しくてがんばって手ですいてると、暖かく湿ったタオルが乗せられた。

「痛いだけだからやめときなさい。後で梳いてあげるから、タオル落とさないように座ってなさい」

「うん。ありがとう、かあさま」

「どういたしまして。さあ、朝ご飯食べましょうか？シルヴァンももうそろそろ戻ってきますしね」

かあさまに抱っこされてそのままカウンターの席まで連れてかれた。５歳にしては小さいわたしはよく家族に抱っこされる。

昔の記憶を思い出した最初の頃は恥ずかしくて抵抗してたけど、今はもう慣れてされるがままにしてる。小さい今だけで大きくなったできないし、王都に住んでるにいさま達とのスキンシップだしね。

わたしの家族はみんな大きい。

とうさまは１８５？だし、かあさまも女性にしては大きくて１７

５?はある。
だから、にいさま達も大きい。一番大きいのはダルにいさまで、とうさまより大きく１９１?。
二番目はレンにいさまで１８２?で、双子のテルにいさもまとセルにいさまは二人揃って１７９?。テルにいさまとセルにいさまは、弟のレンにいさまに背を抜かされて悔しいらしくて、この前帰ってきたときに練習相手にしてボコッていた。学生相手に大人げなかった…
最後に、この中では一番小さいリューにいさまは１６０?。同年代の中では大きい方なのに、この家族の中だと小さくみえる。ダルにいさまなどよくからかっている。

カウンターにあるイスに座ってかあさまが淹れてくれたホットココアを飲みながら足をぶらぶらさせて、かあさまがご飯を持って来てくれるのを待つ。
少しして、かあさまがわたしの分と自分の分をトレイに乗せて持ってきて、わたしの前にホットケーキを置いた。

「ヤッター！ホットケーキだ！」
「お待たせ。どうぞ、召し上がれ」
「いただきます！」

云うと同時に、食べやすい大きさに切ってあるホットケーキにフォークをさして食べた。

おいしい！かあさまのホットケーキはふっくらして、シロップがたくさんかかって、なのに口の中に広がる甘さが甘ったるくなくおいしいね。

わたしはリスみたいに頬が膨らむくらい詰め込んでもぐもぐと食べる。

「そんなに急いで食べなくても誰も取らないわよ。そんなに急いで食べると喉を詰まらせるわよ」

「ふぁっれ、おいひいんふぁもん」（だって、おいしいもん）

零れないように気を付けながら答える。

そんなわたしをかあさまは頬えみながらみている。その顔はもう帰ることができない世界にいる母さんと同じもので、幸せなのに…哀しくなって泣きたくなる……

「そうだよ。美味しのはわかるからよく噛んでお食べ」

そう云われて、ぽんと頭に手を置かれて撫でられた。

フォークを持ったまま振り返ると、そこには予想通りの人が立っていた。

「とうさま！」

わたしの頭を撫でたのは出掛けていたとうさまだった。

わたしはファークを持ったままとうさまに抱きついた。案の定とうさまの来た服にフォークについていたシロップが付いちゃったけど、とうさまは気にしないで抱きしめ返してくれた。

「ただいま、レティー、リーナ」

とうさまはわたしを抱きかかえて、わたしが座っていたイスに座って、わたしを自分の膝に乗せた。

そして、かあさまの唇にキスをして、わたしの頬にキスをした。

とうさまは必ず最初にかあさまにキスをする。
かあさまはとうさまにとって一番大切な人で、かあさまもとうさまが一番大切なんだと思う。多分確実に何かあった時とうさまは、かあさまにいくら罵られようがわたしやにいさま達よりかあさまを助ける。
別に、わたしもにいさま達も哀しいとかいう感情はないんだ。とうさまがわたし達を愛してくれてることはわかってるし、その気持ちがわからなくはないから……

「おかえりなさい」
「おかえりなさい、とうさま」
「今、紅茶いれますね。そのままリーナを膝に乗せていてもいいですが、食べる邪魔はしないで下さいよ」
「わかってるよ」

呆れた顔をしてかあさまはとうさまを注意して、調理場に向かった。

とりあえずわたしは食べるのを再開する。
とうさまはそんなわたしをにこにこと笑顔見つつ、時々頭を撫でる。

とうさま、わたしの頭撫でるのすきだなぁ…　にいさま達もか……

そんなことを考えながら気にせず食べていると、突然とうさまがあーんと口を開けてきたので、ホットケーキを口に入れてあげる。
「ありがとう、リーナ。ダル達と違ってリーナは優しい子だね。ダ

ル達は最近冷たくて…　僕があーんしても無視するし、抱きつこうとすると容赦なく斬りつけてきたり攻撃魔法を使ったりして嫌がるんだよ……」
「とうさま、にいさま達が嫌がるのは当然だと思う…」
「えぇぇっ?!何で?大切なコミュニケーションじゃないか?!」
「……にいさま達の年頃になるとそういうのは恥ずかしいんじゃないかな?ほら、反抗期とかもある齢だろうし」

帰ってくるといつもご飯食べるときとか、とうさまからできるだけ遠い席に座ろうと頑張ってるなぁ……　いつもは物静かなレンにいさまが怒鳴ったりするし。
まあ、反抗期ってやつだね。

のしっと、とうさまがわたしの頭に顔を乗せてきた。
わたしが思っているより落ち込んでいる。わたしを取り合ってケンカをよくするけど、とうさまにとってはにいさま達も大事な自分とかあさまの子供だし、嫌われるのはやっぱり怖いんだよね…

「…とうさま。にいさま達は別にとうさまのこと嫌いじゃないと思うよ。だって、かあさま以外どうでもいいと思ってるとうさまが愛してくれてるんだもん。それに、とうさまが嫌いならわたしに会うためだからといってわざわざ王都からかなり離れたこんな田舎まで帰って来ないって。にいさま達もとうさまが好きだよ」

顔を乗せてるから見えないだろうけどにっこり笑って、頑張って短い腕を伸ばしてとうさまの頭を撫でた。
とうさまがもっとぎゅっと抱きしめて来た。ちょっと痛かったけど我慢する。

わたしはとうさまが大切に思ってる人達と必要以上にコミュニケ

ーションを取りたがって…、愛情を確認したがっているか知っているから…

「あらあら、シルヴァンったらまた落ち込んでるの？今度はどうしたの？」

しばらくそうしてると、とうさまの朝食と紅茶をトレイに乗せてかあさまが戻って来た。

「…レティー……」

力なく呟いて少しの間ジーとかあさまを見つめた後、わたしを膝の上から下してイスに座らせると、カウンターを飛び越えてかあさまに抱きついた。

かあさまはしょうがないわねと、呟いて苦笑しながら、でも、愛しいという瞳でとうさまを抱きしめる。

まだ少し残っているけど頭の上の蒸しタオルを取ってカウンターの上に置いて、わたしはイスから降りて店のドアに向かう。

ドアを開けながら振り返ってかあさんを見て云う。

「外で遊んでくるね。お昼は森の中で木の実でも取って食べるからお昼いらないよ」

「わかったわ。あんまり森の奥に行ってはだめよ」

「うん、わかってるよ。じゃあ、行ってきます！」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

にこって笑ってかあさまに手を振って外に出る。

カチャッといってドアが閉まった。

わたしは森に向かって歩き出した。春の風が優しく髪を撫ぜて行った…

さっきの光景を思い出すと胸が痛くなった。多分、自分がしたことの結果が突きつけられているから……

受け止めないといけないし、償わなければいけない。

とうさまをあそこまで追い込んだのは、橘　凛、わたしだということを……

わたしと、とうさまと、かあさま　1（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

これからどんどんこの世界の設定を説明していきたいと思います。
次話は多分、会話より主人公の独白とか、回想が多くなるかも……
それが終わったら、主人公の兄達が出てきます。

そして、あの人も……ね？

これからも読んで下さると嬉しいです。

わたしと精霊（前書き）

今回も会話が少ないです…
次話は会話を増やしたいと思います。

わたしと精霊

わたしが住んでる村は国境線になっている森の近くにあって、森を通る旅人の休憩所になっている。

この森には名前が付いていない。昔から精霊が住む森、精霊が生まれる森と云われていて、不可侵の森としてどこの国も名前を付けることはしなかった。

森は広大で実際精霊達が多く森の中心の泉の辺りに住んでいて、彼らは人間が中心の泉に近づかないように結界を張っている。だから、この森を挟んでいる2つの国に行くにも中心部を通らずに行く。

いまだ嘗て、中心部に辿り行けた者はいないと伝えられている。

ここ数十年は、《人間に裏切られ精霊に愛された勇者が眠る》森とも云われている。

わたしはいつも森の中で遊ぶ。別に村には子供がいないわけじゃないけど、みんな年上で家の手伝いをしているから遊べないんだ。

だから、森で精霊達と遊んでる。

いつものように、森に入ると数分で精霊が迎えに来てくれた。

「おはよう、リーナ」

「おはよう、ディオン。久しぶりだね。最近、いなかったからどうしたんだろうって思ってたんだよ」

今日のお迎えは水の精霊の長・ディオンだ。
ディオンはいつものように抱きついてわたしに頬にキスをしてきて、わたしもディオンの頬にキスを返す。

いつものことだけど、ディオンだけじゃなくて他の精霊もキスが好きだなぁ。いや別に、いいんだよ。嬉しくないわけじゃないから。

「ああ、ちょっと立て込んだ用事があったんです」
「そうなんだ。…もう、大丈夫なの？」
「ええ、粗方片づけて来たんで、もう僕がいなくても大丈夫です。なんで、本当は今日の当番はオリオンだったんですけど交代してもらったんですよ。やっぱり彼はとっても優しいですね」
「…イジメ過ぎちゃだめだよ？」
「僕は苛めたことはないですよ、一度もね……フフ…」

わたしはディオン含みがある笑みを見て、ちょっとオリオンが可哀想に思った…
ディオンは外見は１０歳ぐらいの男の子なのに、精霊の長の中で一番年上だったりする。わたしも最初知ったときはとても驚いた。

精霊は外見と年齢は大抵は当て嵌まらないらしい。ある程度齢を重ねると自分の好きな外見に変化させることができるらしくて、ディオンみたいに子供の姿になる精霊もいるし、老人の姿の精霊などいて様々だ。
精霊は獣型より人型が力が強くて、その中でも自分の身体を自在に変えることができる者が強い。大抵は年を取るにつれて力が上がるので、精霊の長は精霊の中でも特に長生きの者がなってる。

火の精霊の長・オリオンは２０代後半のマッチョな男なんだけど精霊の長の中でまだまだ若いから、一番年上のディオンには頭が上

がらない。
まあでも、わたしもディオンの黒い笑みは怖いな……　いつもは爽やかな笑みなのに、偶になる黒い笑みはとてつもなく恐ろしいオーラが出ていて、最高の時は逆らうと殺されると思うぐらいすごいらしい。
わたしはそこまでのレベルは体験したことはないけど、オリオンとか地の精霊の長・ヴァラスはよく怒らせて餌食になってるらしい。

「じゃあ、行こうか？みんな待ってますしね」
「うん」

うなずいたわたしをディオンはそっと抱き上げた。落とされることは絶対ないんだけど、わたしは落ちないようにディオンの首に腕を回してしっかりしがみ付く。
そんなわたしを微笑んで眺めてディオンはわたしのおでこにキスをした。

もう一度しっかりとわたしを抱えなおすとディオンは地面を思いっきり蹴って走り出した。精霊以外には目視できない程の速さで森の中を駈ける。もし人がいたとしても風が吹いたとした感じられないと思う。
何回も体験してるけど慣れなくて、いつもぎゅっと眼を閉じてしがみ付いている精霊の肩ら辺に顔を押し付けてる。

マジでこれは怖いんだよ！
結界張ってくれてるから風圧とか感じないけど、景色が変わるのが想像以上に速くて目が回りそうだし…っ　ジェットコースターなんて目じゃないよっ、三半規管？が丈夫で良かったって思う…

今わたし達が向かっているのは精霊が集まる泉で、この森の中心にあって人が入ることが許されていない。大昔のまだ人と精霊が交流が盛んだった頃は多くの人が訪れていみたいだけど、人の心が変わって行くにつれて精霊を迫害していったので、この泉は人が入れないように精霊の長が結界を張った。

「ほら、着きましたよ」

わたしは首に腕を回したままそろそろとディオンの肩に押し付けていた顔を上げる。

そこには綺麗な泉が広がっていて、泉の周りには様々な形態の精霊が沢山いる。いつもしなくていいって云ってるのに、彼らはわたしに気が付いて跪いていく。

「だからっ、そんなことしなくていいってば…っ！」

「しょうがないですよ、リーナ。僕たちにとって貴女は大切なお姫様で、尊い人なんですから」

いやいや、わたしにそんな価値ないし。

わたしはディオンの言葉に首を振って苦笑した。

「…そんな風に笑わないでください。僕たちは貴女を困らしたいわけじゃないんですよ」

「でも、ホントこんなのは困るよ…　わたしはディオン達はとても大切だから対等な関係でいたい。こんな跪かれると一線を引かれた感じで嫌だ」

わたしはやりきれなくてディオンの服をぎゅっと握る。

どんなことがあってもわたしは彼らが大好きだ。この世界に召喚されて優しくしてくれたのは同じ人間じゃなくて種族が違う彼らで、どんな時もわたしの味方だったのは彼らだった。

出会ったすべての人がわたしを裏切ったわけではないけど、わたしはあまりにも人に裏切られ続けた。

だから、多分わたしは心のどこかで人を…、家族でさえも疑っている。いつかわたしを裏切るんじゃないかと……

「リーナ…っ」

「「「「姫っ」」」」

わたしの名前を呼んで、突然ディオンが強く抱きしめてきた。その力はものすごくて、一瞬だけど三途の川が見える程でわたしを抱き潰すつもり?!、と思った。

顔が息ができない程ディオンの胸に押し付けられてて、苦しくなって必死になんとか顔を上げたら、視界に今まで跪いていた精霊達がわたしの方に突っ込んできて、見えない壁に打つかって勢いよく吹っ飛んでいた。

えっ?!なにこれ?!

わたしはディオンが正気を取り戻して彼らを止めるまで唖然とその光景を見つめていた。

昔から彼らのわたしに対する感情の起伏は激しかったけど、昔より何倍も激しくなってない…?

えーと、これはわたしのことが大好きな証しと喜んでいいことな

んでしょうか…

わたしは彼らよりすごい人がいることをこの時まだ知らなかった

……

わたしと精霊（後書き）

読んで頂きありがとうございます。とても嬉しいです。

次話は精霊のことと主人公の勇者の時を少々書きたいと思います。

今後もどうかよろしくお願いします。

では、また（＾Ｏ＾）／

わたしととうさまの出会い（前書き）

大変お待たせしました（／＿；）

読んで下さってる方、お気に入りに登録して下さった方、評価して下さった方、ホントすみませんでした。

楽しんで読んで頂けると嬉しいです＞（＿　＿）＜

わたしととうさまの出会い

甘くておいしい／／

今わたしはディオンと並んで泉に脚をつけて、風の精霊に取ってきてくれた果物を食べている。

わたしが食べてるこの果物は形はブドウに似てるけど、色と味は全く違ってて、皮の色は真っ青で実が真っ赤という何とも不気味で不味そうなのに、イチゴに似た味がして甘くておいしかったりする。

そうそう、精霊の長の中で人の一般常識と価値観を理解してる光の精霊の長・アルテミシアに聞いて知ったんだけど、この果物ってとても珍しもので上流階級の人達しか手に入れることができないくらい高いものなんだって。なんと、わたしが今いる国の一般階級の人の収入3ヶ月分！

そんなのを毎回来るたびに食べてるわたしって……

「はぁ…」

「ん？どうしたの？」

「…いやね、この果物を週何回も食べてることがばれたら面倒なことになるなぁ…って思ってね。もう、面倒なことに巻き込まれるのは嫌だし……」

「リーナ……　心配ないですよ。貴女のことが人間にばれることはないです。僕たちが口を滑らすことは絶対ありませんし、最近の人間の中に魂を判別することができる者は一人しかいません」

「そうなの？　……それって、もしかして……」

わたしの頭の中に彼の顔が浮かんだ。

「彼ですよ」

「…やっぱり……」

そうだよね…

出会ったときから、色々人間離れしてたし。魂を判別することができても不思議じゃない。

「本当に彼は凄いですよ…　人間であれ程の魔力を持っていますし、自らの力のみで下級精霊を視覚に捉えることができますしね。それに、僕たちがあらゆる手段を使って隠してたリーナが転生したことに気づきました」

「……え？！」

驚きで手に持っていた食べかけの果物を泉に落としてしまった。普段なら持ったいないから急いで拾うんだけど、あまりの衝撃でそのままわたしはディオンを凝視したまま固まった。

……彼が……気づいた…？

「ほ、ほんとに…？」

「本当です。彼が貴女が転生したことに気づいたのは、貴女が記憶を取り戻した日です。あの時、貴女の魔力が一瞬盛大に放たれたので、王都にいる彼も感知することができたんでしょう。まあ、一瞬の出来事だったので、場所まで特定することができなかったみたいですけど」

「それなら、よかった……」

わたしはほっと胸をなでおろした。でも、胸の奥が小さく疼いた…

彼に気づかれたのは予想外だ。
だって、ここは王都から結構離れてるから彼や他の私と面識がある人達が訪れることはまずない。国境を超えることがあっても彼らは上流階級の人達だから転移塔を使って移動するし。

「しかし、王直属の隠密隊を動かして探してはいるみたいですよ」
「……よくないじゃん…」
「ええ。本当に鬱陶しいです。この前なんて無謀にもレヴァンを尾行しようとしていましたね。まあ、失敗してましたけど……」

無謀だね……
中級クラスの精霊を尾行しても成功するのは稀なのに…　精霊の長なんて確実に人間には無理。もし成功したとしても、それは精霊が気づいていて放置したからとかだし。

「でも、これからは少し気を付けた方がいいかな？ディオン達のせいで居場所がばれることはまずないと思うけど、どんなことがヒントになるかわかんないし。それに、とうさまがいるしね……」
「そうですね。彼は、元宮廷魔術師で彼の幼馴染ですからね」

とうさまは彼の幼馴染。

わたしが前世でとうさまと出会ったのは、勇者だったわたしを確認しに来た彼の護衛としてついて来たから。会って間もない頃のと

うさまは、今と違って感情がない人形のように無表情で、喋るのも彼やもう一人の護衛の幼馴染の騎士だけだった。とうさまにとってはわたしは存在していないもので、話し掛けられることも目を合わせることもなかった。

まあ、わたしもそのことをを気にすることはなくて、逆に構われなくてほっとしてたかな？あのころはもう傷つくのが嫌だったから、こっちの世界に信じられる人はいないと思い込んでいたし。

でも彼に救われた後は気になり始めて、そして気が付いた。

彼に救われる前の自分と同じということに。傷つくことを恐れて自分だけの世界に閉じ籠っていることに……

わたしは、返事を返してもらえなくても何度も話し掛けたし、無理やり彼の隣に座ってご飯を食べたりした。

最初の頃は無視されて避けられた。

でも、時間が経つにつれて喋ることはなかったけど避けられることはなくなった。わたしが隣に座ってもすぐに席を立って離れずに一緒に食べてくれて、わたしの話す話に相槌を打ってくれた。

そんなある日、いつも通り魔物を討伐した後に起こった。

この日は、いつもより魔物が多くて倒すのに手間取っていた。戦っているのはわたしと彼の仲間だけで、わたしの護衛（監視）として付いてきている騎士達は何もしないでわたしの後ろで見ているだけだった。騎士達は勇者であるわたしが自分達を守るのは当たり前だと考えていた。

わたしも習慣になっていて騎士達を背後に庇って戦っていた。

２匹の魔物が同時に襲ってきて、片方の魔物の心臓に剣を突き立

てて仕留めたその隙を付いてもう1匹が騎士達に襲いかかった。そして、わたしが急いで駆け付け仕留めた時には騎士の一人が腕を傷付けられていた。
幸いにも傷は浅くて大したことはなかったが、騎士の一人は彼と魔物の処理をしていたわたしを無理やり引き離し森の奥に引っ張って行き怒鳴り散らした。

「浅かったから良かったが、死んだらどうしてくれるんだ！あんたは俺たちを助けるためにここにいることがわかっているのか！？」
「……」
「あぁ？なんだその眼は？あんたは黙って俺たちを守っていればいいんだよっ！！」
「……っ！」

今まで従順に従ってきたわたしが反抗的な眼を向けたことが気に入らなかったのか、右頬を容赦なく殴られた。そのせいで口の中が切れたのか血が口から垂れてきた。
無言で血を拭って、冷めた眼で見た。昔なら怯えていただろうけど、彼に出会ってから色々取り戻すことができたからもう怖くはなかった。

怯えなかったわたしが気に食わなかったのかもう一回殴り掛かってきた。

「そんな眼を向けんじゃねえっ！……っ！？」

わたしの頬に当たるはずだった拳が寸前のところで止められていた。
止めた手の持ち主の顔確かめるように見上げた。

「……消えろ」

ぼそりと呟かれたその一言に秘められた怒りに戦いた騎士は、すごい速さで逃げて行った。

「助けてくれてありがとう、シルヴァン」

「……」

助けてくれたのはとうさまだった。

とうさまは無言でわたしの腕を掴み近くの岩場に連れて行って、座らせると頬に手を添えてきた。頬がぽーと暖くなり、暖かさがなくなると今まであった痛みのなくなった。

治癒魔法で頬の痛みを取ってくれた。

「ありがとう」

「……どうして抵抗しない？」

ぽつりととうさまが呟いた。

「……諦めてしまったからかな？」

微苦笑を浮かべる。

とうさまは無音で続きを問いかけてきた。

……云ってもいいの…かな？

だって、今までこんなことを訊かれたことないし。彼にだって話していない……

わたしの心の闇のことだから

でも、とうさまは続きを云えと見つめてくる。

こんなにとうさまと見つめたのは初めてかも…

「……意味がなかったから。わたしだって最初から抵抗しなかったわけじゃないよ。でも、わたしが泣こうが喚こうがやめるてくれたことは一度もなかった…　それどころかエスカレートして、もっと暴力を振るわれた。抵抗された方が燃えるとかいう奴も中にはいたんだ」

「誰？」

「…あの国の宰相。こっちに来たばかりの頃は元の世界に帰りたくて暴れたりしたからね。シルヴァン達には悪いけどこの世界がどうなろうが関係ないのとか、なんでわたしが魔王なんて倒さないといけないのとか考えてたし。まあ、そんな感じだったからぼろぼろになるまで色々やられてさ」

「……」

無表情なのに辛そうな風に見えて、そっととうさまの髪を撫でた。

「そんな時、抵抗する気力が無くなって何もしなかったら酷いことされなかったんだ。それからかな、抵抗しなくなったのは……　てか、感情を捨てたのは…　そうしないと自分を守れなかったから……　弱かったんだ」

「そんなことない。お前は強いよ。弱いのは僕だ…」

とうさまがわたしに自分のことを話してくれたのはこの時が初めてだった。

魔力が強すぎるとうさまは小さい頃から人の心を読むことができたらしい。今みたいに上手く魔力をコントロールすることができなかった頃は、誰彼かまわず心を読んでしまって化け物と呼ばれたりして気味悪がられた。そう、実の親にさえ……

それから、感情を出すことをやめ喋らなくなった。そんなとうさまを助けたのは彼やもう一人の騎士の幼馴染だった。2人はとうさまを怖がることはなくて、心を読まれても笑ってすました。

でも、成長してコントロールができるようになってもとうさまのことを知る人は怖がって近寄ることはなかった。

とうさまはまるで人事のように淡々と話した。

でも、わたしはとうさまが傷ついていることも、悲しんでいることもわかった。わたしの手を握るとうさまの手が微かに震えていたから。

その後、彼が探しに来るまで小さい頃の思い出やわたしの家族について、魔法について、わたしの世界についてとかを話した。

移動中や食事の時、休憩などで今までのとうさまが嘘のように表情豊かに沢山喋るようになった。

とうさまは大切な友人になった。

あの国から助けてもらった後、わたしにかけられた呪いに気づいた時も彼には知られたくないという気持ちを汲んでくれて黙っていてくれた。とうさまがとても苦しむことはわかっていたけど、頼んでしまった。

死ぬことになるあのパーティーの日、会うのが最後になるとは思っていなかったから約束してしまった。それが、あれほどの深いキズとなるとは思わなかった……

《僕が絶対リンの呪いを解くから、生きて下さい》

わたしは久しぶりにとうさまの出会いを思い出した。
あの時の約束は果たすことはできなかった。あの約束はとうさまがわたしが死にたいと思ったことに気づいたから持ちかけてきた。
わたしが死ぬことを諦めることを願っての、優しくて哀しい約束…

「リーナ、もう一つ知らせがあるんですが聞きますか？」
「…？」
「貴女の詮索のためにシルヴァンを王都へ呼び戻すことが決まったそうですよ」
「え…？」

ちょっと待って。
シルヴァンはとうさまで、とうさまが王都に戻る＝わたしも王都に行くってことだよね？
王都に行ったら王様に挨拶しに行かないといけないから＝彼に挨拶で、わたしの魂がわかる彼に会うってことは彼にわたしのことがばれるってことじゃん？！

「ええぇぇぇ？！！」

静かな森の中にわたしの叫び声はよく響いた…

なんかこれから大変な日々が続く予感。

わたしの人生に平穏とか、安らぎって少なくないですか？！

そんな頭を抱えて悩むわたしを精霊達は暖かい眼差しで見守っていました。

わたしととうさまの出会い（後書き）

明日にもう一回投稿できたらいいなぁと頑張っています。

次は兄達との話か、入れずに王都に行く話か迷っていますが書き上げたいと思います。

『彼』もいい加減名前を出して上げたいとも思っています。

色々書きたくて頭の中ゴチャゴチャしてますが、頑張ります。

これからも応援よろしくお願いします（＾ｏ＾）／

わたしとにいさま達（前書き）

大変遅くなってすみません！！
ほんとにすみません！

わたしとにいさま達

わたしにはにいさまが5人いて、今はみんな王都にいる。

にいさま達は良くも悪くもキャラが濃い。

流石美形のかあさまととうさまの子だけあって美男子ばかりだけど、キャラが濃くて台無しになってると思う。でも、王都じゃモテモテなんだって…　世の中やっぱ顔がいいと特だ。

そんなにいさま達の休みが見事揃って全員が家に帰って来ると毎回いろいろ凄いことになる……

タッタッタッ。

いつもと同じように朝ご飯を食べるために階段を下りて食堂に向かった。

今日は起きた時に何か嫌な悪寒がした。

いや、寒いからじゃないよ？春先だから偶にまだ寒い朝だったりするけど、今日は青空が広がって太陽がポカポカと照らしてて暖かったし。

だから、きっとこれは何か起きる気がするんだよね……　これま

での経験上こういうのって嫌になるほどあたるんだよ……

考えながら歩いてると食堂から若い男性の話し声が聞こえてきた。

ん？

まだ、開店前なのにもうお客さんが来てるのかな？

とうさまとかあさまは、きっちりしてるようで所々適当だったりする。お客さんが開店前に来ても何もなかったら入れるし、逆に色々忙しかったら開店時間が来ても店をあけなかったりなどなどマイペースにやっている。

まあ、こんな田舎だから大丈夫だけど街だったらクレームが沢山来てるかも……

今日は珍しく寝癖もなくてお客さんの前に出ても大丈夫だと思ったので、わたしはそのまま話し声が聞こえる食堂に向かった。

後の祭りだけど、食堂よりかあさまがいる調理場に行けば良かったと激しく後悔した…

食堂の扉を開けて見えた光景に一瞬固まったけど、わたしは中にいる人達が反応する前に素早く扉を閉めた。

な、なんでいるの？！

…今日ってまだ平日だよ！仕事や学校があるよね？！

ドアノブを無意識に掴んだまま心の中で絶叫してると、閉まっていた扉が開けられた。

ドアノブを掴んだままだったわたしは扉を開けた人に倒れた。扉を開けた人は倒れこんできたわたしを難なく受け止めてそのまま抱き上げた。

「……」

「……お、おはよう？」

「……」

逃げようとしたわたしを捕獲したのはレンにいさまだった。

ただじっと見つめてくるレンにいさまに、可愛くみえるように首を少し傾げながら挨拶をする。

この仕草は、とうさまとかあさまのＤＮＡを受け継いで美形に生まれたからこそできるものだ。

前世だったら絶対に無理。だって平凡だったし……

でも、あの人は可愛いって云ってくれたなぁ…

「…なぜ、逃げようとした？」

「えぇ～と……」

に、にいさま達が全員揃ってるからなんて云えない……

「俺達が嫌いなのか……？」

いや、そんな捨てられた子犬のような眼をしなくても？！

しょぼんと垂れてる犬の耳も幻想だけど、見えるんですけど！

「にいさま達を嫌いになることはないよ！大好きだよ！」

……全員揃うと厄介だから避けたいけど。

「そうか…」

レンにいさまぎゅっとわたしを抱きしめて、わたしもにいさまの首に腕を回して抱き返した。

小さい時から暇ならかあさまに抱きついてるとうさまを見てきた影響か、にいさま達も抱きつき癖が付いてる。

でも、にいさま達が抱きつくのって、わたしだけなんだよね。かあなまやとうさま、にいさま達同士でやってるの見たことないや。

「いつまで、リーナを独り占めするきだ?!」

「…ほぇ?!」

声がしたと思ったら、レンにいさまじゃないもっと逞しい腕の抱きしめられた。

見上げると、眉間に皺を寄せて不機嫌な顔のダルにいさまだった。

「…俺とリーナの邪魔しないで下さい。燃やしますよ?」

……はい?

レンにいさま、殺気が恐いです……

「おお?やれるもんならやってみろよ。まあ、できるもんならな…?」

ダルにいさま、挑発するのやめて…

てか、5歳も年下でまだ学生のレンにいさまが近衛騎士のダルに

いさまに勝てないのわかってるわけないのわかってるくせに……

二人の殺気が辺りに広がっていく。

レンにいさまいつの間にかどこかから取り出した杖を構えて呪文を唱え始めて、わたしを利き手の左手に座らせる感じで抱きながらダルにいさまは、そんなレンにいさまを口元に笑みを浮かべ右手で剣を抜いた。

「二人とも何してるのさ？」

「リーナに怪我させるつもり？それなら、僕たちも黙ってないけど……？」

声がした方に振り向くと、テルにいさまとセルにいさまが笑って立っていた。

「テルにいさま、その氷の塊はなに？セルにいさま、にいさまの剣に電気が帯びてる気がするんだけど……」

わたしの質問に意味深げな笑みで答えた。

中性的な美形だけにその暗い笑みは悪魔の微笑みで、思はずダルにいさまの服をぎゅっと握り締めてしまった。

や、やばい！！

キレかけてる！

サーと辺りの温度が下がっていくのを感じた。

レンにいさまも唱えるのをやめていて、ダルにいさまの余裕綽々だった口元も引きつっていた。

「ほら、頭に血が上ってるみたいだから冷やしてあげようと思って

ね」
「ほら、リーナが傷つけないように痺れさせて動けなくしようと思ってね」
そんな大きな氷の塊をぶつけたら、冷えるだけじゃすまないと思うんだけど、テルにいさま?!
剣で斬り付けられたら、痺れるだけじゃないよ、セルにいさま?!
「お、落ち着けって!俺らがリーナを傷つけるわけないだろ?!」
「わかんないよ?」
「ダルにいさんは変な所でへまするし、」
「レンは首席と云え、まだ学生だしね」
ダルにいさま逃げ腰で、レンにいさまは二人の言う通りなので反論できなくてぶすっと不貞腐れてる。
この場合って、わたしがどうにかした方がいいのかなぁ?
このままだとレンにいさま大丈夫だと思うけど、ダルにいさまがやばいことになりそう……
この家の総合的にみた力関係って、かあさま>>>>とうさま>>>ダルにいさま>テルにいさま・セルにいさま>>レンにいさま>リューにいさま>>わたしだけど、テルにいさまとセルにさまがタッグを組むとダルにいさまも勝てないんだよね。
ダルにいさまも近衛騎士になるくらいだから強いんだけど、双子の神秘で相乗効果で一人の時より何倍も強くなるから二人同時に相手すると勝てない。
テルにいさまとセルにいさまって、ケンカしててもどっちかが危なくなったら助けに行くんだよね。

何とかして勝とうとして、ケンカ中を狙ってダルにいさまも挑んだみたいだけど最後の最後に駈けつけて来られて負けてたらしい。
というわけで、今まで一回もダルにいさまはテルにいさまとセルにいさまに勝ったことがない。

「わたし、久しぶりににいさま達みんな揃ったから、みんなで仲良く一緒にごはん食べたいなぁ……　だめ…？」

本日二度目の首を傾げて見上げる仕草。眼を潤ませるオマケ付き！

「「「「「うっ！」」」」」
「？」

…えーと、どうしたの？！
みんな一斉に顔背けないでよ！しかも手で顔を覆いながらっ！

本当に涙が浮かんで来て、恥ずかしくて隠すようにダルにいさまの肩口に顔を押し付けてぐりぐりした。
やってから気づいたけど、ダルにいさまが今着てる服って近衛騎士の服だ。

「リ、リーナ？！」

ダルにいさまの焦ってる声と、慰めるように誰かが頭を優しく撫でてきた。

でも、気にするか！
乙女？を泣かせた罰で、わたしの涙でぐちょぐちょにしてやるっ！

あの仕草は地味にわたしもダメージをうけるんだい！

この時、わたしは気づいていなかった。
にいさま達が顔を手で覆って背けたのは、わたしの仕草で出そうになった鼻血が出ないように抑えるためだったということに……

「リーナ、泣き止んで！」
「一緒にご飯食べよう！」
「俺らが悪かった！今日はもうケンカしないから、泣き止んでくれ！」
「もう、（今日は）剣抜かない」

慰めながら、ぐりぐりと顔を押し付けて甘えてる？わたしに可愛いと萌ていることも知らなかった。
テルにいさまとセルにいさま、レンにいさまが、わたしに甘えられて戸惑いながらも鼻の下を伸ばして喜んでいるダルにいさまに今夜闇討ちを仕掛けに行こうと考えていたことも…

わたしが回復して顔を上げたのは、にいさま達が慰め初めてから15分後だった。

忘れていた。
起きた時に感じた嫌な悪寒を……

幸せの時間は理不尽にも唐突に失ってしまうことを……

密かに、だけど着実に運命は動き出していた

わたしとにいさま達（後書き）

カメ以上に遅くてすみません……
今後、頑張っていきたいと思ってます！
これからも読んで下さると嬉しいです＞（｜　｜）＜

?今回の補足？
リーナの考えの家族内の力関係は本編の通りですが実際は以下の感じです。

レティーツィア（かあさま）＞＞リーナ＞＞とうさま＞＞＞ダリウス（ダルにいさま）＞アンテルム（テルにいさま）・アンセルム（セルにいさま）＞＞フローレン（レンにいさま）＞リュドヴィック（リューにいさま）

です。

レティーツィアは最強ですね、はい。
魔力とかだけならシルヴァンなんですが、レティーツィアを溺愛してるので勝てる日はないと思います。

リーナはアイドルなので、みんなメロメロです。
本人は自覚なしですが…
唯一勝てるのは、母親だけだと思います。

リーナ以外の子供にはシルヴァンは厳しいです。
決して、嫌っているわけではないですよ。リーナと同様に愛しています。

でも、男の子なので厳しいです。

兄弟達もケンカしまくりですが、大切に思っています。

まとめ：とっても仲がいい家族です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0793q/

転生した元勇者の物語

2011年8月19日22時51分発行